

3.4 注目すべき種の分布状況

近年、園芸用に輸入された種や飼料穀物に紛れ込んだ種子の自然界への逸出などに伴って、本来は日本に生息しない国外の生物種が侵入し、自然界へ広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の移動による、国外外来種（シナダレスズメガヤなど）の逸出・定着によって絶滅危惧種（カワラノギクなど）の生育場所が奪われるなどの影響が懸念されています。また、外来種と在来種の交雑によって雑種が形成され、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失が懸念されています。

ここでは、河川への国外外来種の侵入状況を明らかにするため、国外外来種の確認状況について整理しました。

【国外外来種の河川への侵入状況】

(植物調査、河川環境基図作成調査)

● 河川水辺の国勢調査における新規確認の国外外来植物は13種を確認

平成23年度河川水辺の国勢調査において、ダツタンソバ、デロスペルマ・クーペリ、ヒメハマアカザ、セイヨウオダマキ、Echeveria 属、カキノキ、ペポカボチャ、サルビア・グアラニティカ、ホナガカワヂシャ、クンショウギク、セッカニワゼキショウ、ハトノチャヒキ、ハリノホの13種の国外外来種を初めて確認しました。これらの種の導入目的を緑化用、耕作地雑草、牧草用、園芸用、その他に分けて整理しました。その中で、デロスペルマ・クーペリ、Echeveria 属、セイヨウオダマキ、サルビア・グアラニティカ、クンショウギクの5種は、園芸目的で栽培されていたものが逸出したものと考えられます。これらの種が本来の分布域ではない河川に生育することで、在来の生態系に何らかの影響を与えることが懸念されます。

(資料掲載：3-96ページ)

河川区域において、シナダレスズメガヤやハリエンジュなど、多くの国外外来種がみられるようになり、生態系への影響が懸念されています。

ここでは、河川区域への国外外来種の侵入状況を把握するため、導入目的を緑化用、耕作地雑草、牧草用、園芸用、その他に分けて整理しました。

今回とりまとめを行った45河川で、387種の国外外来種が確認されました。そのうち、ダツタンソバ、デロスペルマ・クーペリ、ヒメハマアカザ、セイヨウオダマキ、Echeveria 属、カキノキ、ペポカボチャ、サルビア・グアラニティカ、ホナガカワヂシャ、クンショウギク、セッカニワゼキショウ、ハトノチャヒキ、ハリノホの13種の国外外来種を初めて確認しました。地方別にみると、東北地方2種、中部地方3種、中国地方1種、四国地方4種、九州地方3種となっています。

導入目的は、13種のうち、デロスペルマ・クーペリ、Echeveria 属、セイヨウオダマキ、サルビア・グアラニティカ、クンショウギクの5種について、園芸目的で導入された種が逸出したものと考えられます。

新規確認の国外外来種の利用区分

No.	科名	種和名	地方	確認河川	利用区分*
1	タデ科	ダツタンソバ	中部	木曾川	その他（農作物）
2	ハマミズナ科	デロスペルマ・クーペリ	東北	鳴瀬川	園芸目的
3	アカザ科	ヒメハマアカザ	九州	番匠川	その他（不明）
4	キンポウゲ科	セイヨウオダマキ	四国	肱川	園芸目的
5	ベンケイソウ科	Echeveria 属	四国	肱川	園芸目的
6	ウルシ科	カイノキ	中国	太田川	その他（不明）
7	ウリ科	ペポカボチャ	東北	鳴瀬川	その他（農作物）
8	シソ科	サルビア・グアラニティカ	四国	肱川	園芸目的
9	ゴマノハグサ科	ホナガカワヂシャ	中部	長良川	その他（不明）
10	キク科	クンショウギク	四国	肱川	園芸目的
11	アヤメ科	セッカニワゼキショウ	中部	長良川	その他（不明）
12	イネ科	ハトノチャヒキ	九州	山国川	その他（不明）
13		ハリノホ	九州	山国川	その他（不明）
計	12 科	13 種	5 地方	7 河川	2 型

※利用区分については以下の文献を参考にした。

- 世界の雑草Ⅱ 離弁花類 全国農村教育協会 平成 5 年
- 世界の雑草Ⅲ 単子葉類 全国農村教育協会 平成 9 年
- 新牧野日本植物圖鑑 北陸館 平成 20 年
- 日本の帰化植物 平凡社 平成 15 年
- 日本帰化植物写真図鑑 全国農村教育協会 平成 22 年
- 日本帰化植物写真図鑑第 2 巻 全国農村教育協会 平成 22 年
- 北海道外来種リスト-北海道ブルーリスト 2010- 北海道 平成 22 年
- 原色園芸植物大図鑑 北陸館 昭和 59 年

その他（不明）については、上記文献に記載があったものの、利用について明記されていないものである。